

いも類と俳句 4

焼藪(やきいも)

いさを

- ・ 声ばかりで焼藪屋まだ見えず
- ・ 地球には自転の遅速焼藪屋

野路斉子
樽本 勲

青木昆陽が八代将軍徳川吉宗へ「甘藪考」を上書したのが享保19年（1734）、その翌年には上総馬加村（現千葉市幕張町、昆陽神社）、江戸小石川の養生園（現小石川植物園）、上総豊海不動堂（現山武郡九十九里町）の3カ所で甘藪（サツマイモ）の試作が行われ、成功した。その後甘藪栽培は次第に増え、寛延4（1751）年に吉田弥右衛門が上総から川越に甘藪を入れた、また天明（1783～88）の大飢饉には餓死するものは皆無であったなどの記録があります。相当な勢いで甘藪栽培が普及したようであり、その様子を伺わせるのが江戸市中八百八町の各番屋で商れたほどの焼藪屋の繁盛記です。当初は蒸し藪が主流でしたが、寛政5年（1794）冬に本郷4丁目番屋で初めて“八里半（藪の渾名、栗には少し及ばない）”という行灯を出して焼藪を売った、その後小石川白山前町屋に十三里の行灯が出たとの記録があります。使われた藪は江戸から街道で“十三里”離れた川越産の物が多かったとのことで、これが「九里（栗）四里（より）うまい十三里」の洒落の起源ともさえている。さて、その焼藪屋ですが、流行り出した寛政5（1794）年頃から昭和30年（1955）頃までは番屋や町屋などで売り続けられ、筆者の小学生時代は町内に必ず一軒、夏はかき氷、冬に焼藪を商う店がありました。高度成長とともにそのような店が少なくなり、代わりに登場したのが流しの“石焼き藪”で、今では軽トラックで廻る“石焼き～いも”のメガホンの声を通例です。楊句はいずれも、その流しの“焼藪屋”に関するものです。野路斉子は“石焼き～いも”のメガホンの声は聞こえるが、なかなか家の至近距離に近づかない軽トラックの焼藪屋に苛ついている様子。多分直ぐ出られるように勝手口に笹などを持って立っている。冬なので勝手口は寒い。笹も冷たい。「嫌だわね、早くいらっしゃいよ」と寒さに足踏みしながら苛立ち待つ、しかしそれを越える甘く温かい焼藪を買う衝動には勝てず我慢する様子が目に浮かぶ。さすが女性の句である。一方、第2句はなるほどに男性の句。地球の自転には物理学的にも若干の遅速がありますが、焼藪屋がなかなか家の至近距離に近づかないのは、自転が急に遅くなり時間経過が遅れているからだと見ている。多分、焼藪を買った後「はふはふとむさぼり食べる」間の自転の速さには気づかない。結局、事前事後で地球時間の帳尻は合う訳です。かように「焼藪」は冬の風物詩、季語は冬です。ジャンボ宝くじは当初は歳末にしかなく、冬のものでした。＜焼藪を買い宝くじ買ってみる 遠見未草＞、ほかほかと手に温かい焼藪が、当たるかもしれないと連鎖反動的に宝くじを求めさせた。この逆の買い物の順序はあり得ない。貴方も焼藪と三億円、如何ですか。